ナト様信仰☆始まるよっ

hizy-sky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナト様信仰☆始まるよっ

【Ｎコード】
Ｎ７１４０Ｚ

【作者名】
ｈｉｚｙ－ｓｋｙ

【あらすじ】
村方草太郎は高校生である。
そんな彼は突如、銀髪金目の美貌の少女に拉致され、謎の空間に監禁される。
少女は「邪神ナイアルラトテップ」を名乗り、村方を誘惑する。
前の純潔は既に喪失していたが、それを面白く思わなかった邪神は髪を触手に形作り、後ろの純潔を強引に散らせる。
ようするに「アッー！」だ。

その後、紆余曲折があり、村方は「邪神ナイアルラトテップの信奉者」としての人生を歩まざるを得なくなる。
ガンバレ少年、神はきっとキミの味方だろう。

おれが触手に掘られる話（前書き）

この作品には『触手要素』があります。

触手が触手に犯される、主人公が触手に掘られる、主人公が物語の中では次元違いに強い、主人公がほとんど描写無く邪神化、主人公がニャル様信奉者、などの要素に嫌悪感を抱く方にはオススメできません。ブラウザバックを１５連打してお帰りいただく事を推奨させていただきます。

触手、好きだぜ？や触手とか大好物ですｗ、触手に掘られるとか俺得ｗといった変態触手紳士の方々の中にも、さらに嫌悪感を催される方もいらっしゃるかもしれません。

が、作者は一切の責任を持たないことをご了承ください。

おれが触手に掘られる話

ああ、聞いてくれ。

誰でも良い、聞いてくれるんだったらオッサンだろうがババアだろうが赤ん坊だろうがイヌだろうがネズミだろうが文句は言わない。そんな贅沢は言わないし、なんなら全財産の半分をくれてやっても良い。それぐらいワケがわからない状況なんだ。

携帯も繋がらないし、衣服もビリビリに破かれて用をなさない。端的に言えばいまのオレは全裸だ。

ベットリとした白濁液を全身にヌメリつかせて森の中に放置されてたんだ。そして傍らに放り投げられたように見知らぬ携帯電話が転がり落ちていた。

オマケに尻が妙に痛い。痔になったみたいに動きに支障がある。アレだ、要するに掘られた。アッー、だ。しかも相手は触手だ。最悪だ。

こうなった発端はたぶんアレだろう、心当たりがあり過ぎる。聞いてもらっても良いか？　ああいや、断ってもキミはオレにガッチリと体を掴まれている状況だから聞く以外の選択肢は無いと思ってくれ。オレに捕まったのが運のツキだ、諦めろ、オレも色々と既に諦めている。

コトの発端は高校の帰り道だ。
オレの家は高校まで、歩いて３０分くらいの距離なんだ。途中に繁華街があってな、結構賑わってるんだよ田舎のくせに。でだ、今日はバイトも入ってないし、特に急いで帰宅するような予定も無かったからよ、ゲーセン行ったんだ。　一人で。
ああ、勘違いスンナよ？　別にオレに友達がいないってワケじゃないからな。

まあ、そこら辺は良いとしてだ。ゲーセンに行っても、いつもやってるゲームの調子が悪いみたいで修理してたんだよ。そいつで今日こそはスコア更新しようと思っていたんだけどさ、なんというかそういうことがあると萎えるじゃん、気分っていうの？　それが。

仕方ないからゲーセン出て繁華街をブラつくことにしたんだ。そして少し歩いてるとさあ、可愛いお姉さんがカラオケのチラシを配ってるわけよ。行くしかないだろ？　行ったよ、一人で。ご希望通り。

ああ、突っ込みは無しな。面倒だから。

んでさ、ヒトカラで思う存分音痴を曝け出して店員に苦笑いされたよ。チクショー、テメェも歌えよ、自慢の美声とやらを聴かせろよ。そんなわけで店員にも一曲歌わせたら意外にお上手なんだよ。あのイケメン。先輩に見つかって怒られてやがったから笑ったわ。ザマァ。

ああ、そんなこんなで気分も爽快でカラオケを終えて、次は電器店で物色しようかなとウロウロしてたらさ、居たんだよ。天使が。

ああ、ここから本題に入るぞ？聞き逃すなよ。

なんとな、その天使はよ、薄い銀色のサラッとした美髪を風に靡かせて噴水のベンチにチョコンとお座りなさってたんだ。

見惚れたよ、一目惚れだ。

遠くからでもしっかりと確認できる真っ白い肌。ロングスカートから見える可愛らしい足。

気づいたら彼女に向かって歩み寄ってたね。ズカズカと一直線に天使へと、熱い眼差しを携えて。ガン見だ、舐め回すように全身を厭らしい視線で視姦してたよ。近づいてみたらさ、瞬きしてるのがハッキリと見えるんだ。そしてその双眸から覗く金色の瞳にときめいたね。

気づいたら声をかけていた。ナンパなんて初体験だからさ、どう声をかけていいのかわからないけど、それでも声をかけたのさ。

「あの、」

そんな感じでね。

「見えるの？」

何故か驚いた声色で彼女は返してきたんだ。

驚愕の表情。なんというか、声をかけられるなんて思いもしなかった、そんな感じの表情だった。そんな電波な彼女の言葉にもオレは気にも留めなかった。鈴を転がしたような、消え入りそうな、そんな綺麗な声音。

「見えるよ、オレにはキミが見える。この世の誰よりも美しい少

女の姿が、この眼に見えてしまう」

思い出すと歯が浮くようなイタイセリフだが、それでもオレはそんなことを口走った。

もはや会話の内容よりも、この美しい声をどれだけ聴けるか、それがこの世の全ての問題だと思った。戦争？経済問題？そんなもの知らんわ！とばかりに。

そして喰われた。

彼女の口は弧を描いた月のように耳の辺りまで裂け、オレを頭から飲み込んだのだ。

そこからの記憶はアレだ。掘られた記憶だ。聞きたくないだろ？

聞きたい？まあ良いだろう。心して聞けよ、ウサギさん！

オレは喰われた、と思った。しかし、目を開けてみると変な場所に居たんだ。

丸いベッドに座らせられていたんだ。なにが起こったのかさっぱりわからなかったが、とりあえずベッドに座っていた。ラブホテルみたいな場所でな。

しかもだ、後ろを見たらバスローブ着た天使がニコニコと笑ってらっしゃる。こりゃもう、突撃しか選択肢は無いだろ？

で、ルパンダイブを決め込んだ瞬間、吹き飛ばされたわけだ、天使に掌底喰らわされてな。銀髪を靡かせて目にも留まらぬ速さで放

たれた顔面クラッシャーが直撃し、奇声を上げながら壁へと激突。気絶しなかったのがおかしいくらいだ。

「ねえ人間、キミ中々に良い感じの霊格を持っているじゃない。ちょーっこし改造されてみないかしら？」

楽しくてしょうがない、そんな風に愉快そうに嗤いながらオレの首を掴んで顔を近づけてきたんだ。もうあれだろ、ヤルしかないだろ？

思い切りキスしてやった。唇に。ネットリと。舌を絡ませて。淫靡に。濫りがましく。そのくせその内にしっかりと愛を込めて。渾身のディープキス。

ポカンとしている天使のプルップルな唇を、ついばむ様に優しく、時折貪るように激しく。ちゅっちゅちゅっちゅとしてやった。死んでも良い、そんな心境だった。

知らなかったのか？オレ、ディープキスにはかなり自信あるんだぜ？とばかりに調子に乗っていたら首もがれた。ブチブチブチッとイヤな音を立てて。痛いなんてモンじゃない。ウルトラスーパー激痛だ、バカヤロウ！と思いながら、首だけになっても、それでもちゅっちゅし続けた。死ぬ気の根性イェーイ。

投げ捨てられ、蔑みの眼差しで吐き捨てられる。そして柔らかい足に踏まれて罵倒された。

「なんなの？この肉団子。莫迦なの？死ぬの？ゲテモノ風情が、邪神の口を吸うなんて。予想外にもほどがあるわ」

そんな言葉が聞こえた。ご褒美です。

まあ、常識的に考えてありえない。莫迦もなにも既にオレは首を

千切られてから１０数秒は経っていたはずだ。意識を保っているなんてありえないし、ましてやこんなことを考えるのなんて常識外だ。ありえない。

だが、オレはその「ありえない」をありえることにしてしまったようだ。

バスローブに身を包んだ天使たんが後ろを向いてグチグチと文句を言っているのを横目に、まずは体を動かす。首の無い体が意識のあるオレの首へと近寄ってくる。

正直、我が身ながらデタラメな恐ろしさを感じることを禁じえなかったが、体はオレの首を鷲掴みにし、千切れた箇所を無理やり押し付ける。

グリグリと肉の飛び散る音を発しながら、切断面を抉るように押し付けると、これまた「ありえないこと」が起きる。

なんと千切れた頭が体とくっついたのだ。いつの間にオレは人間を辞めたのだろう、そんな風に思いながら、血肉飛沫の音を聞いて振り返った彼女と目を合わせる。

そしてコミカルに笑いながら彼女に微笑みかける。

「やあ、美しいお嬢さん。お名前をお聞きしてもヨロシイカナ？」

驚愕。そのときの彼女の顔はそれ一色で埋め尽くされていた。

ブツブツと「そんな……」だの「本当にコレ、人間？」だの「有り得ない」だの「まさか、異空間に入った瞬間に存在が昇華したとでも言うの」だのと呟いていた。

息を呑み、まじまじと穴が開きそうなほどガン見してくる彼女はとても美しく、思わず食べてしまいたいほど可愛らしかった。が、そこは思い留まる。ほら、オレ紳士だから。

やがて自分の中の意見が纏まったのか、コチラを真剣な目で見つめてくる。凄く可愛い。でも自制する。だってホラ、オレ紳士だし。

「申し遅れたわね。ワタシはナイアルラトテップ。邪神ナイアーラトホテプ、ニャルラトホテプとか呼ばれているわ」

「ああ、申し訳ありません。マドモアゼル。小生の名は村方、村方草太郎と申します。以後、お見知りおきを」

彼女の鈴の音を転がしたような、ふつくすぃ声音を脳内に録音しながら、紳士的な感じに挨拶をする。紳士的なオレかこえぇー。

にしてもナイアルラトテップか。たしかクトゥルフ神話に出てくる最強クラスの邪神だっけ？クトゥルー初心者のオレはあまり詳しくないが。

「……まあいいわ。結論から言うと、アナタ、もう人間じゃないわ。既に理解できているでしょうけど。あからさまに人間じゃない。人間な筈が無い」

そいつはわかる。が、そこまで嫌そうに繰り返さなくてもイイじゃないですか。結構傷つきますよ、その扱い。

まあ、それはともかく、この子、可愛いなぁ。まじで邪神なの？人じゃないの？たべちゃってイイの？ヤッちゃうよ、イイの？

そんな感じで二度目のルパンダイブをかますも、膝蹴りで撃沈される。でもチラッと割れ目が見えたからイイや。バスローブで膝蹴りはしちゃダメだぞっ☆

軽蔑の視線を向けながらも、どこか得体の知れないモノに対する気味の悪いモノをみるようなビクビクとした眼差しにビクンビクンとなりながらも立ち上がる。

「ふむ。ヒトではない。そう言われると素直に納得できる、というわけではないが、聞きたい。私はいったいどのようなモノになってしまったのか、教えてもらえるかな？マドモアゼル」

いきなり言葉の最後にキリッ！という効果音が付きそうなくらい真面目な顔で話し始めたオレを見て頭痛が起きたのか、眉間の辺りを揉むナイアルラトホテプ。

しばらくすると、オレのギャップに耐性がついたのか、はたまた気にしないことにしたのか、若干嫌そうな表情で言葉を紡いでくれた。

「とりあえず、素の話し方で話してちょうだい。頭が痛くなってくるわ。

それはどうでもいいとして、詳しく調べてみなければわからないのだけれど、恐らくアナタはワタシが作り出したこの空間に飲み込まれた際に、霊格が変質したんでしょう。

とりあえずわかっている能力は、首をもがれたくらいじゃ死なない不死性。それとなんとなくだけど眼に強い違和感を感じるから、たぶん邪眼の類。

今のところわかるのはその程度ね。本当に意味がわからないわ」

邪眼、邪眼と仰られたか、今！テンション上がってきた。とりあえず眼に神経を集中してみる。

すると見える見える。この世の桃源郷が。まず手始めに、彼女の美しい柔肌が見える。そして桜色のポッチが自己主張しているのも。

童顔のくせに中々に豊満なパイオツをお持ちじゃあありませんか。あれですか、ロリ巨乳とやらですか。はっ、まさか狙ってやっているのか！くそぅ、かわええのぅ、かわええのぅ。

気味悪いものでも見るようにしていた天使、もとい邪神サマが怪訝そうな表情でオレを見てくる。

「まあ、どうでも良いわ。改造するつもりだったけど、今さら無理やりなコトするとおかしくなりそうだし。どうしようかしら、簡単な方向性を与えて強化していくか、それとも今あるモノを最大限伸ばすようにして基礎的なモノはそこそこ上げる程度にしようかしら。

……そうね、後者にしましょう。これ以上無理に変調させてキモいモノが出来たら勘弁だし、今あるモノをメインにバランス良く上げていきましょう」

目線を下に向け、顎に人差し指あてて可愛らしくフンフンと悩んでいる姿にときめきながらも、丹念に体中を邪眼とやらの透視能力で視姦する。毛が生えていないことに気づき、フォォォッッッとなるのを禁じえない。

どこまでオレのツボを連打してくるのだ、この邪神ちゃんはッ……と戦慄していると、彼女はいきなりその銀の美髪を伸ばしてオレの体を捕らえた。

「ねえ、アナタ。ワタシとイイコト……しましょ？」

言葉尻にハートマークが付きそうなくらいに甘ったるい声で誘ってくるものだから、つい三度目のルパンダイブをかましちまった。言葉尻ってなんかエロい感じがしない？

髪の拘束を一瞬で無効化し、ナイアルラトホテップのバスローブを剥く。そしてその巨乳を揉みしだく。優しく優しく、丹念に、味わうように、しっかりと。

ニャルラトホテプー好きだー！結婚してくれー！

そんな風に叫びながらの１５回戦。普通なら腰もダルくなって死にそうになるだろうが、そこはホラ、オレ不死身だし？
そんなノリで解決し、ネットリと長く時間をかけた１５回戦目を終え、一息つくと、背筋に緊張が走った。一瞬のうちに四肢を拘束され、空中に吊るし上げられていたのだ。

「ふぅ……アナタ、初めてじゃあないみたいだし？ワタシの体を好き勝手にしてくれちゃってまあ、オシオキの時間よ、ボウヤ？」

グッタリ状態から復帰した彼女はそう良い、淫靡に嗤う。こうして捕食者と被捕食者が入れ替わったのである。オレにとって最悪の形で。
凶悪な形のグロチ〇コもどきがドリルのように超高速回転しながら、オレの菊門へと近づけられる。

「じょ……冗談だよな？」

現実逃避をしたくてそう口にしてみるも、ニャルラトテップはニッコリと微笑むばかり。
その様子に顔を青くし、必死に抵抗するも、ガッチリと拘束は強固で抜け出せない。コイツ、学習しやがったなッ！と戦慄する。

ケツの穴を埋め尽くす痛みと、なにか掛け替えの無いものを失ったかのような喪失感に、意識を持っていかれそうになりながら最後に聞いたのは
「ナト様とお呼びッ！」やら「ケツ〇〇コは気持ち良いかい？この肉袋ッ！」といった、ハッチャけた邪神サマの高笑いだった、そういうわけだ

笑えるだろ？

おれが触手に掘られる話（後書き）

どうですか、期待はずれでしたか？

触手のなんたるかをわかっていない？触手が触手に犯されていない？男が触手姦されても興奮しない？タグ詐欺？金返せ？

それは申し訳ありません。なにしろワタクシ、触手紳士を自称して3日の若輩者。どうか皆様の良心にお見逃し頂けるよう、お願い申し上げるしかありません。

邪神と化したオレが、遥か格下の土地神にパシられるハナシ（前書き）

ああ、こんにちは。
半人前見習い触手紳士こと、ヒジスカです。

仕方ないな見てやるよ、つまんないけど時間空いてるし見てあげてもよろしくってよ、触手のなんたるかを貴様に教授してくれるわぁ！という方、よろしければ是非見ていただけると、作者は凶悪邪神ドリル〇ンコで掘られるくらい興奮します。

邪神と化したオレが、遥か格下の土地神にパシられるハナシ

まあ、そういうわけだ。
なんか意味がわからないうちに天使のような女王さま、ナト様はハッチャけ過ぎて壊れたんだろう。
凶悪なアレに菊の門をぐりゅぐりゅぐりゅっ！とされて色々と大切なものを失くしてしまったオレはここでキミを鷲掴みにしているのだよ。ウサギくん。

なんというか、そのほとんどが自業自得のような気もしないではないけど、たぶんアレだ、これもすべてカミサマってやつの仕業なんだよっ！クソッ、ふざけやがって！あいつはいつも、オレたちに残酷な試練を与えやがるッ！
八つ当たりどころか濡れ衣も甚だしいテンションで天に唾を吐く。当然のように落下した汚液が顔面に降り注ぐが、気にしない。というか元々白濁に塗れていてもっと汚い。

そんなわけで全身を洗ってしまいたいんだ。ここら辺に湖かなにか無いかね、教えてくれたら見逃してあげるよ。話も聞いてくれたしね。
ウサギさんを開放し、水場まで案内させる。ビクビクと一直線に、まさに脱兎の如く森の中を走り抜けていく彼の背中を追っていく。

ウサギさんの時速７０キロ程度の速さでひょいひょいっと木々の合間を駆けていく後姿を、ある程度の距離を保ちながら追走する。
ナト様に菊門ファックを受けて屈辱的に改造されてしまったオレの身体能力はヤバイ。どれくらいヤバイかというと、それなりの速度で走ると音を超えそうな雰囲気だ。ぶっちゃけバケモノだ。
しかもアレだ、腕が伸びる。髪の毛も自在に操れる。体の一部に

触手を形作れる。チン〇デカい。透視が出来る。下を向くとこの星の外核とか内核まで見えるぐらいにヤバイ。

ふんふんふーん、と下手くそな鼻歌を歌いながら走っていると、湖が見えてきた。っていうか、透視で周囲を見渡せば簡単に見つけられたよね、コレ。

とりあえず、死ぬ気で案内してくれたウサギさんに免じて、ここら辺の動物さんは出来るだけ殺さないようにしよう。にしても一本角が特徴的な可愛らしいウサギさんだった。

バッハハーイ、と手を振り、またしても脱兎の如く背を向けて走り出した彼を見送る。どうでもいいけど、常に全力疾走で疲れないのだろうか、彼。

まあいいや、とばかりに振り返り、湖を見る。

太陽がサンサンと降り注ぎ、水面の反射でキラキラと輝いている。アレだ、どうしようもなく飛び込みたい衝動に駆られる。

どうせ止めるやつも居ないし、ここに居るのは野生動物たちだけだろう、と思い切り飛び込むことにした。ヒャッハー！とダッシュし、大ジャンプ。

湖の中心辺りの２０メートルくらい上に跳び、そのまま垂直にドブシャッと飛び込む。水飛沫が馬鹿みたいに撒き散らされる。

勢いのままに水中へと潜り込み、湖底まで潜ろうとする。しかし、思ったより底は深いらしく、暗い穴がポッカリと空いていた。

不思議に思い、透視で中を覗こうとした瞬間、うじゅるじゅるじゅるっ！といきなり飛び出してきた触手に四肢を絡めとられる。

「む……ぐっ、ごぼぉ」

と息が切れそうになりながら、引っ張られる力に抵抗をやめ、心を落ち着ける。そして触手がオレに声をかけてきた。

『汝、何故妾の領域を侵す？』

穴の中に引きずり込まれた先で、なにか得体の知れない空間にいきなり出て来た。

「（ナト様の異空間と同種の感覚？）」

と疑問に思いながら、ようやくオレをここに引き込んだ触手の全容を見てみることが出来た。

２～３０メートルはあるだろうイカのバケモノだ。そしてそのイカの目と目の間には、妖艶な雰囲気の美女が生えている。

たぶん、コイツがさっき声をかけてきたんだろう、と思いながら、うーんと、思案する。

『あー、あー、聞こえる？コレで良い？』

『うむ？念話が出来るとは面妖な人間よ。うむ、通じておる、話すが良い』

なんともまあ、尊大なことで。そう内心で思いながら、勘で通じた「念話」とやらが正しかったのを確認する。

『とりあえず、ここドコ？なんか、わけのわからない内にここに飛ばされてきたんだけど。

ナト様……ああ、これはオレのご主神様ね？そのナト様との愛の語らいの後に、なんか気づいたらここに居たんだ。

もしも無礼があったら謝るし、領域ってのを侵したんなら、そっちについても謝罪させてもらう。

それよりもまずは、ここがドコで、アンタが誰なのか、そいつに

ついて教えて欲しいんだ。なあ、頼むよ』

とりあえず、邪眼の効果らしきモノで見えたコイツのステータスが、大幅にナト様やオレよりも段違いに低いのでタメ口で話しかける。

なんというか、ナト様を戦闘力１０兆、オレを戦闘力６兆ぐらいと仮定すると、こいつは３０から４０だ。あまりにも違いすぎて、なんというか遜るのが馬鹿らしく思えてくる。

なんでコイツ威張ってんだ？って感じが半端無い。最大限に下手に出てはいるものの、コイツがそれで良いと思うかは別問題。

襲い掛かってきたら、どうしようか。ウサギさんに案内して貰った礼もあるし、出来れば穏便に行きたい。血生臭いことは遠慮したい。

そんなことをおもっていると、

『妾はこの湖を中心とした神域の土地神よ。

本来ならば、この異界で神域の調整のための力を制御しているのだがな、この神域を歪ませるおかしな者が現れたからここに引きずり込ませてもらったというわけだ。

そのような事情ならば、まあ、わからんでもないがな。

だが、故意にだろうが無意識にだろうが関係なく、貴様が異界の理で神域を歪めたのは事実。その件についてはきちんと責任を取ってもらうぞ、良いな？』

なんというか、神さまって肩書きとこの見た目のせいで誤解していたが、どうやら結構な人格者らしい。

まあ、実際にここら辺付近を、意識してのことではないとはいえ荒らしてしまったのは事実。

穏便にいくために神域とやらの修復くらいは手伝わせてもらうか。ちょうどいい落し所だろ。そう思い、了承の意を伝える。

『わかった。しかし、おれには神域とやらの修復のやり方なんぞは知らない。
やり方を教えてもらうか、もしくは力を貸すからそっちでやってくれると助かる』

『ふむ、まあ仕方が無いの。
あいわかった。おぬしが知らぬというのであれば、こちらでやるというしかあるまい。
まあ、修復自体は時間がかかるとはいえ、それほど大変というわけではないしな。だが、その間、妾は無防備になってしまうのだ。おぬしにはその間の神域の防衛を頼みたい。
おぬしは世界の狭間を超えてきたことでかなりの力をも得ているはずだからな。今までも何度かおぬしのような者を見たことがあるが、例外なく強力な術者だった』

オレに対しての呼び方が「貴様」から「おぬし」に変わったのは、まあ納得してくれたのだろう。まあ、実力に関しては隔絶しているというか、次元違いの力を持っているから問題無いだろ、たぶん。

『うん、わかった。だけど、防衛が必要ってのはどういうことなんだ？ここはなにかに狙われていたりするのか？』

その質問に、イカさんはああ、というような顔をした。

『そうか、おぬしは異界から流されてきたのだったな。なら知らぬのも無理はない。
この世界には今、魔族とその他の種族が争いを起こしているのだ。そして、この神域はかなりの霊格を有していてな、どちらの勢力にも狙われておる』

なんというか、すごい荒事を押し付けられた気がした。

『んで、その侵入者ってのはどうすりゃ良いんだ？追い返すのか？殺すのか？』

『うむ、基本的に対話を望むのなら荒事を起こす必要はありゃせんの。

しかし、神域と妾を貶めるような輩には容赦する必要はない。存分に神の怒りをぶつけてやるが良い。ああ、無理に殺すことはないぞ？生かして帰すほうが、今後の手間も減るだろう』

『ああ、わかった。

対話を望むやつらには温厚に対応。そこら辺は念話で逐一アンタに連絡しよう。

で、荒事を持ってくるような馬鹿どもには、それ相応の「ご対応」とやらをさせてもらう、こんな感じで良いな？』

『ああ、それでよい。これは神域の地図だ。

赤い印は持ち主の場所、黄色はここの場所、黒いのは外部から来た者だ。一応外部の地図も載っているが、使うことはなかろう』

そう言い、イカさんは自分の触手の中からうりゅうりゅうりゅっ、と何かの皮で出来た地図を放り投げてきた。

キモい粘液がこびり付いたそれに顔を顰めながらも受け取り、見る。イカさんが言ったとおり、赤い印と黄色い印が地図の中に出ている。

『神域の修復ってのはどれくらいの時間が掛かるもんなんだ？』

『おぬしが荒らした分の修復は7日前後、以前から荒れていた分も合わせて大体10日ほどだ。
もちろん、やるからには全ての修復が終わるまでおぬしには働いてもらうがな。それぐらいは仕方なかろう？』

まあ、オレが荒しちまった分の修復が殆どなんだし、異論はないが、それでもなんというか釈然としない。

『わかった。んじゃ、さっそく外に出て巡回してくる。なにかあったら呼んでくれ。すぐに来るよ』

『おう、言ってきてたもれ。それでは妾も今すぐ修復の作業に取り掛かるとするのでな。何か異常があれば呼ばせてもらうとしよう』

なんというか、すごい詐欺にあった気分になる。
彼女的に言えばたぶんタダで護衛が出来てラッキー、多少荒らされたけどまあ、プラマイゼロどころかプラスだわ。
そんな感じか？

ボリボリと頭を掻きながら、イカさんが形成した異界の出口に向かって歩いていく。
オレはどうやってナト様の所まで行こうか考えていた。まあ、神域の防衛とやらを終えてからイカさんに聞けばいいか、と楽観的に考えることにする。
天使さまからの放置プレイを受けてちょっとハァハァしてきた自分の気を静めるために、可愛い女の子が進入して荒事起こしてくれないかな、とか思っていた。

邪神と化したオレが、遥か格下の土地神にパシられるハナシ（後書き）

ああ、触手紳士の皆様方、もしかしたら触手淑女の方もいらっしゃるかもしれません。改めまして皆様方、お読みいただき、ありがとうございます。

ネタバレになりますが、今話で触手に犯される触手、というキャラクターが登場いたしました。今後のイカさんの乱れ具合をお楽しみにお待ち下さいますよう、お願いいたします。

誤字脱字など、ご報告いただければ肘掛野郎はウネウネと名状しがたいダンスをしながら喜びます。

それでは皆様、いあ　いあ　なとさま　あい　あい　なとさまぁ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7140z/

ナト様信仰☆始まるよっ

2011年12月25日01時48分発行